

『うつほ物語：零本：江戸前期-中期』

平安中期の物語。二十巻からなるわが国最初の長編物語で、幻想的、伝奇的な「竹取物語」から写実的な「源氏物語」に展開していく過渡期の作品。作者未詳。源順作とする説などがある。題名は、主人公藤原仲忠が幼時北山の大杉の空洞(うつほ)に住み、猿に養われて育ったという首巻「俊蔭」の話による。清原俊蔭(としかげ)、その娘、藤原仲忠(なかただ)、犬宮の四代にわたる琴の名人一家の繁栄と、源正頼の娘貴宮(あてみや)が仲忠ら多くの青年貴族の求婚をしりぞけ、東宮妃となり、やがて皇位継承争いが生じる過程を描く。

本書は、この物語の第1巻「俊蔭」美しい奈良絵本に仕立てたもの。現存する奈良絵本『うつほ物語』はいずれも「俊蔭」巻のみである。表紙は、紺紙に金の切箔砂子を霞型に撒き、金泥で土坡・水流・植物などを描くが、その絵柄は冊ごとに異なる。表紙中央上方に貼られた短冊形の題簽にも、金箔散らしや金泥下絵があり、「うつほ物語一(五全)」と墨書されている。見返しは模様入り金紙。以上すべて原装で、いわゆる嫁入り本仕立てである。本書は本来全5冊であったが、現在残っているのは、第1、3、4冊の一部と、第5冊の全部(ただし絵を除く)である。現存する絵は全11図。その多くは冊子からはがれており、どの場面を描いたものなのか特定が困難なものもある。

[参考文献]

成蹊大学図書館所蔵稀書解説目録：成蹊大学図書館，2006.9 026/Se17
2013300481

“うつほものがたり【宇津保物語】”，日本国語大辞典，JapanKnowledge，
<http://japanknowledge.com>，(参照 2014-10-25)

うつほ物語①

遣唐使に選ばれた清原俊蔭は、渡唐の途中で難破のため波斯国へ漂着する。そこで木を切る音の素晴らしさにひかれて、その木を手に入れて琴にするために、音をたどって山に分け入る。千丈の谷底にどっしりと根を張り、梢は天を突くかのように高く、枝は隣の国まで延びている桐の大木を伐り倒して、割って細工をしている者がいる。そのものの頭の髪の毛を見ると、まるで剣を逆立てたようである。顔を見ると、燃えさかる炎のように真っ赤である。足や手を見ると、鋤や鍬のように堅く鋭い。木を切っていたのは恐ろしい阿修羅であった。俊蔭は阿修羅に木を所望して、怒らせてしまい、今にも食べられそうになった時に、竜に乗った童子が空から降りてきて、阿修羅に黄金の札を与えた。札には「3つに分けた木の下段の部分は、俊蔭に施す」と書いてあった。阿修羅が木を割ると、天稚御子が天から下りてきて、その木で琴を30面造り、天女が琴に漆を塗り、織姫が琴の緒をすげた。

[参考文献]

うつほ物語①新編日本古典文学全集14 / 中野幸一校注・訳 : 小学館, 1999.6
918/35/14 0099102057 p. 24-29 引用、要約

うつほ物語②

清原俊蔭は、こうして得た琴を7人の仙人と七日七夜弾奏していると、その響きが仏の国まで達したので、そのとき仏が文殊に仰せになるには、「ここから東の方で、天人がお植えになった木の音がするようだ。早く確かめに行きなさい」と仰せになった。文殊はすぐさま獅子に乗って、瞬時の間にそこに着いてお尋ねになった。事情を聞き、文殊は帰ってこのことを仏に報告なされる。そこで仏は文殊を引き連れて、雲の輿に乗ってお渡りになって来ると、そのときこの山も河も鳴動して普通の状態ではない。

山や野は震動し、大空は鳴り響いて、雲の色や風の音も変わり、春の花、秋の紅葉が時節にかまわずいっせいに咲きまじるなかで、音楽をする人々はますます琴の弾奏に熱を入れていると、そこへ仏がお渡りになって、孔雀に乗って花の上を逍遥なされる。…俊蔭は、この琴を仏をはじめたてまつり、菩薩に一つずつ献上する。仏はすぐに雲に乗り、風になびいてお帰りになると、そのときまた天地は鳴動した。

[参考文献]

うつほ物語①新編日本古典文学全集14 / 中野幸一校注・訳：小学館，1999.6
918/35/14 0099102057 p. 34-37 引用、要約